

2021/9/5-2

(オマケの英語教室 catfish 2 ) 書庫版



前の記事の宿題の答え探しです。

「何故なりすましの英単語に魚、釣り関係が多いのか？」

あの後、色々考えてみたのですが以下のようなことしか思いつきませんでした。

曰く

日本語で言うところの「闇鍋 (やみなべ)」の英語圏イメージが「釣り」と魚」ではないのかなど。

どういうことかと申しますと、

そもそも「闇鍋」とはその中に何が入っているか解らない鍋の事です。

何をつまみ上げるか？解らない。

つまみ上げた物が何であるか？も解らない鍋。

そのイメージを釣りと魚、特にナマズに当て填めてみると

釣りとはそもそも水面下の見えない不特定多数の相手に糸を垂れて引っ張り上げる行為です。

一方水面下には「魚なんだか、両生類なんだか、水生植物なんだか、はたまた水生動物なんだかよく分からない」生き物たちが蠢いています。

例えばナマズやサンショウウオ、カモノハシやタツノオトシゴ、イソギンチャクやウミヘビ等など。

要するに釣る方も何が釣れるか解らない。釣られる方もいま一つ線引きが判然とせず、言ってみれば「水生コウモリ属」のオンパレードみたいなもの。

この状態はまさしく

「闇鍋」

日本語ほど語彙が豊富でない英語圏では、日本語で言うこの一言に置き換えて「釣りと魚」の一群を持ち出したのかもしれないと言う見立てで御座います。

見立ての自信は全く御座いませんが、当たらずとも遠からず位なのかもしれません。

最後は打って変わってのお話し。

以下は、自分が抱いた全くの感想なのですが、自分がこういった解釈をしたのは、どうも今

(こん) コロナ禍渦中での見聞や実体験から

「この世は将しく闇(意識: chaos)だ」

という認識が生まれたからなのかもしれません。

実感としては何でもありのグジュグジュみたいな感じがしておりますから。

注記1)

上記使用表現の「コウモリ」は

「鳥仲間に行けばお前は獣仲間だといわれ、獣仲間のところに行けばお前は鳥仲間だといわれる」故事からの連想イメージで使わせて戴きました。

注記2)

写真は「真っ黒画像」の誤掲載ではありません。

(おしまい)